

第1回 柿田川を語る会 会議要旨

○開催日 令和6年1月17日(水) 10:00～11:50

○会場 清水町役場3階 大会議室

○出席者(委員)

- ・漆畑 信昭 委員 (柿田川みどりのトラスト)
- ・押尾 市郎 委員 (柿田川自然保護の会)
- ・渡辺 敏彦 委員 (柿田川・東富士の地下水を守る連絡会)
- ・石垣 雅雄 委員 (柿田川湧水保全の会)
- ・岩崎 清悟 委員 (清水町みらい会議)
- ・中山 勝 委員 (清水町行政改革推進委員会)
- ・秋元 稔 委員 (清水町区長会)
- ・久保田俊治 委員 (清水町商工会)
- ・木部 一 委員 (清水町ゆうすい未来機構(わくら柿田川))
- ・清水 周一 委員 (Reborn City SHIMIZU)
- ・半田 昭博 委員 (清水町教育委員会)
- ・古屋 勲 委員 (清水小学校)
- ・小澤 徹也 委員 (清水小学校学校運営協議会)
- ・名倉 達 委員 (清水町文化財保護審議会)
- ・猪ノ原 恭 委員 (清水町子ども会育成連合会)
- ・久保田千明 委員 (清水町民生委員児童委員協議会)
- ・小川 侑男 委員 (清水町シニアクラブ連合会)
- ・村上 榮 委員 (一般公募)
- ・山本 博保 委員 (一般公募)
- ・加藤 英明 委員 (静岡大学教育学部)
- ・川村結里子 委員 (三島100人カイギ)
- ・藤井さやか 委員 (一般社団法人いちご)
- ・辛嶋 亨 委員 (沼津河川国道事務所)
- ・柳川 典之 委員 (静岡県(東部地域局))

○欠席者(委員)

- ・渡邊喜久夫 委員 (一般公募)

○出席者(町当局)

- ・関町長、秋山副町長、朝倉教育長、太田企画課長、木村産業観光課長、大嶽社会教育課長、長島都市計画課長、事務局(都市計画課)

○委嘱状交付

- ・漆畑信昭委員を代表として、町長から委員に委嘱状を交付した。

○町長挨拶 省略

○自己紹介 省略

○座長・副座長の選任

- ・柿田川を語る会設置要綱第4条第2項の規定により、町長が岩崎清悟委員を座長に指名し、岩崎清悟座長が中山勝委員を副座長に指名した。

議題 柿田川の保全と在りようについて

1 柿田川流域の保全に関する計画等について

※柿田川自然再生計画、天然記念物「柿田川」指定地内保護地域区分図及び柿田川状況図について、資料をもとに事務局から概略説明を行った。

なお、第2回語る会にて、各主担当から改めて詳細説明を行う旨を報告した。

- ・委員より、天然記念物指定の経緯について確認したい旨の意見があった。

事務局からは、前述の計画に関する説明と併せて、天然記念物指定の経緯について次回開催時に説明する旨を回答した。

2 柿田川にどんな存在であって欲しいと考えるか

※座長から、各委員が柿田川についてどういう感想や想いを抱いているか、発言を求めた。

<各委員の意見>

- ・子どもころは冷たい水に入って泳いだり魚を獲ったりした。

現在では難しいかもしれないが、子どもたちが水に触れられるような事ができればという気持ちがある。

我々世代が感じた事を体験させて、勇壮な水の流れを見ていただければと思う。

- ・人と自然・生物が共存し、人に感動を与えるような場所であってほしい。

他のイベントに関わったことがあるが、体験することが参画者を増やす要因と考える。柿田川も体感し感動を覚えることができるような存在であってもよいのでは。

- ・自然を守る大切さとそれに触れ合うことと、その気持ちをどう育むか、そうした機能を観光や行事に組み込めたらと思っている。

柿田川だけにとどまらず、歴史的な要素も絡めて子どもたちに育む機能を創造して行けたらと感じている。

- ・柿田川（公園）について、環境保全、思い出・思い出（地域のアイデンティティ）、観光・賑わい、コミュニティの場と、人それぞれにいくつかの側面があると感じた。

柿田川公園は、町民が日常使いしてもらいたいと思う。

周辺施設等を含めたエリアマネジメントで考えると、もっと広く違った考えが生まれるのでは。

・柿田川に直接触れた体験のある方々の想いと、水に触れたいという想いを強く感じる。しかし、町民の身近な存在にありながら身近に感じられない。

どのように自然保護と関わりながら、水を身近なものに感じていけるかということがこれからの課題かと思っている。

・柿田川がどうかというのは、住んでいる方にとってその存在がどうかということにたどり着くと思う。

柿田川は清水町の自然の象徴のようなもの、「環境」と言うと柿田川が思いつく。

ほっとする場所、心の拠り所と、そういう重い存在だと思うので、その部分はやっぱり絶対に譲れないな、と思う。

子どもたちは柿田川を学ぶ機会があり、自然・生物・水のことを学ぶ。その中でも清水町の宝物だなという意識があり、それを知らせたい。

・これから少子化等を迎え、子どもたちのいわゆる「ふるさと像」が形成される上で、柿田川がその一助になれば、子どもたちにとって幸せになるのかなと感じた。

・南小学校区は柿田川から外れていて、南小の子どもたちは柿田川について意識が薄いと感じる。

また、町内には柿田川以外にも多くの河川があり、水は米作りの歴史に深く関わる。そういうことも含めて子どもたちに伝えていかないと、町の宝である柿田川の良さをすることはできない。そういう部分を意識してもらえたらありがたい。

・子どもたちが授業で柿田川について調べ、知る機会はあるのだろうが、実際に水に触れたり感じられるかというところではない。

私の育った地域では体育の水泳などを海の中で行ったが、自身の体験から自然の怖さを知っており、自然が大好きで大切にしようという気持ちが育った。子どもたちも五感で感じられるものでないと、自然を大切にしたい気持ちが育たないのではないかと思うので、体感できるものになったらいいなと考えている。

・町民はもちろん、観光客も何回も来たくなるような魅力があり、皆に愛される柿田川であってほしいと思う。

柿田川を観光として考えた時に、まだ何かできることがあるように思っていたが、文化財の指定など、難しい問題もあるかと思う。

柿田川 of 自然を守ることは私たちにとっても大切で、動植物に対しても影響が及ばないように考えねばならず、私たちの宝の柿田川を後世に残し、守っていくために、しっかりとした整備を町にお願いしたい。

・清水町に生まれ育ったシニア世代には、子どもの頃に柿田川で泳いだり魚を獲っ

た人が大勢いる。当時は自然が多く素晴らしい柿田川だった。

人口が増え、名水百選に選ばれ観光客が多く来るようになった。柿田川が全国に知られるのはありがたいが、自然が破壊されるのではないかという危機感を感じる。昔から育ってきた高齢者の思いは自然を残してもらいたい。

- ・町の人でも意外と柿田川に関する関心があまりない。

好きな方は毎日のように柿田川に来て動植物にも詳しいが、公園に入ったことがないという町民も見受けられる。

昨秋の鮎の遡上は 20 年来最大規模であったが、そうした事象にも皆さん関心が薄いように感じる。町はもっとメディアを通して情報発信すればよいと思う。

- ・柿田川兩岸の河畔林には、川に枝葉が水面につきそうなところまで来ているものがある。折れた枝葉が落ちて泥が溜まり雑草が生える。

手が加えられていないことで生じる良くない自然現象が見受けられるので、一定の作業をしていくことは必要ではないか。

また、文学や絵画など、柿田川がそれらの題材として扱われているものもあり、これらに触れることにより、感動を大きく受けるのではないかと思う。

1 月 23 日は「いずみの日」として町で定めていると思う。もっと活用してほしい。

- ・一般的に人が多く集まると、自然は破壊されると言われていて、実際、全国各地で自然が失われてきている。ただ、これからは「人が集まることで自然が守られる」そういう時代に変えていかなければならないと思う。

例えば、外来種は誰が獲るのか、私としては、公園利用者の方の協力も得て、みんなで対策していく必要があるのではないかと考えている。

楽しんで帰るだけじゃなくて、楽しみながらちゃんと働いてもらおう。そんな場になってもいいのかな、と考えている。

- ・皆さんの発言から町に対しての愛着を強く感じる。

柿田川で遊び楽しかった体験などが重なってこの町の良い記憶になって、それが愛着に繋がっていくのかな、と思った。

規制を掛けることは法的な手続きで出来ると思うが、愛着が向くような機会、人と出会う、体験するという機会・経験の共有も、その町の未来を考えた時に大事じゃないかと思う。

環境的側面と公益的側面、そしてにぎわい創出、3つのカテゴリがあって、どこまで許されるのか、どこまで許せないのか…、それぞれラインを変えて、意見をまとめていきながら、この時代に合ったものを探していく。

「ボランツーリズム (ボランティアをしながらツーリズム(旅行)するような取り組み)」というのもあったりするので、そういった形で町内外の人も呼び込むよう

な、この町にあった仕組みが作られるといいなと思った。

・清水町に柿田川があるって、すごい“宝”であり、素晴らしいことだと思う。虫、湧き間、鮎の産卵…と、すごい価値があると思う。

それを子どもに伝えたいと思っていて、外来種の駆除活動などにも参加してもらって、大人がそういう背中を子どもに見せるということや、感動を一緒に味わってもらうことが愛着に繋がると思う。

・外から来た身として柿田川を見ると、本当に稀有な川だな、教育の面からすると本当に貴重な教材だと思う。“宝”という言葉も出たように、本当に柿田川があるというのは貴重なこと。

町内の小学校に通う子どもが柿田川のことを学んだと聞いている。前に通っていた小学校では「川のことを調べる」という授業は聞いたことがなかった。

昔に比べ機会が減ったという話も出ており程度は落ちたかもしれないが、小さい頃から柿田川のことを知っていこうという文化がこの町にはあるということなので、これを繋いで持続可能にしていくことが大事なのでは、と思っている。

そのために、柿田川との距離感・接点をどう持つのかというところが課題になるのではと思う。

・静岡県ではこの地域を「日本の国土のシンボル“富士山”を有している世界との交流の舞台」と位置付けており、柿田川は世界レベルの魅力あふれる自然の代表的なものと考えている。

皆さんの話を聞いていると、地域・町民がこの資源に対し誇りを持っている。将来を考えていこうという心があって、同じ方向を向ける資源だと感じる。

保全と活用の双方をバランス取りながら、自然を後世に繋げていくことも、愛着が若い世代に引き継がれてこの先この地域の将来に繋げていくことも、とても重要な議論になろうかと思う。

・柿田川の保護運動を始めたのは1975年。当時はミシマバイカモが釣り人の針に引っ掛かって抜けてしまい、数を減らしていた。

危機感を感じ、釣り人に白眼視されながらも皆さんの協力をいただき保護を進め、有難いことに、今ではミシマバイカモは全国的にも希少種として評価を受けている。

有機塩素系溶剤の水質汚染も、今日ではゼロとは言わないけれども、汚染はほとんど無くなった。

これらは地元の清水町、国交省など関係各機関、その他の御尽力もあってのことだが、だからやればできる、努力すればできる。そう思っている。

・清水町に移住し初めて第一展望台から柿田川を眺めた時に、国道の真下にあるこ

とにびっくりした記憶がある。柿田川の生物や生態系は「山奥でなければ出会えないような自然」と言われるが、市街地にあるため最低限の手を掛けなければ維持していけない。なので、「最低限の手を掛けること」を行政も含めた町民みんなで維持していけるかを考えるべき。

また、柿田川だけでなく狩野川まで生態系が連続しているので、柿田川だけきれいになっても生態系を維持していけないので、これも一緒に考えていくべき。

この会議の委員は比較的年齢が高い方が多いので、次回、次々回は夏休み時期に開催して、中・高・大学生の若い人たちの意見を聞いてみたい。

・皆さんの柿田川に関する思いを聞いていると、観光化を図って柿田川に人を招きたい、子供の立場など直接水の中に入りたい、という意見も多いと伺った。

保護団体の活動の中でも水に親しむ会、自然観察会を実施しているが、大勢が川の中に入ると傷んでしまう、という実態もある。

柿田川はきれいな水が流れ、河畔林がある、その情景の中に多様な生物が生息している。その生態系のバランスを崩してはいけないという気持ちを持って柿田川に接することも大切だと思う。

河畔林について、悪い自然がいい自然を破壊するという話が出たが、そういうところは人間の手を加えて守らなければならないが、あまりにも近付きすぎてせっかくの自然を無くしてしまっただけでは、子どもたちにとっても将来自分たちが大人になったときに後悔する部分もあると思う。

「活用と保全」ということで、深い自然に対して理解を得た上で考えていきたいと思う。

・昨年、この清水町と三島市との共催により、全国名水百選の市町の人たちが集まって名水サミットの全国大会が行われたが、柿田川を見た方が異口同音に「本当に素晴らしい」「こんなところは初めてだ」と言っておられた。

外部の人の感想から柿田川の素晴らしさを知らされるといったこともあり、改めて我々は町民にその素晴らしさを感じてもらわなければいけないと思っている。

また、所属する団体の活動で、繁茂する外来種駆除を定期的に行っている。若い方にも柿田川に触れていただいて、素晴らしさを味わってもらえる機会ともなるので、今後も続けたいと考えている。皆さんもその時にご参加いただければと思う。

・柿田川は、四万十川、長良川とともに日本三大清流に数えられる。出身は清水町ではないが東部に来るまで知らなかった。そんな川がここにあり、保護活動によって柿田川が守られた、ということに非常に感銘を受けた。

観光に携わる仕事をしており、色々な形で観光をしたいという意見があるが、今は旧来の物見遊山的な観光は流行っていない。目的地で何かをするか、地元の人との体験によって自分の存在価値がどう高められるか、というようにしないと注目さ

れない。

皆さんの話では「住んでよし」と感じていると思われるが、「住んでよし」とならないと「訪れてよし」にはならない。この清水町にこんな素晴らしい場所がある、ということを知ってもらえるような活動、それらをまず始めないといけないだろう、と思っている。

・幼少期には毎年夏になると冷たい水の中に入って、湧水を近くに感じて育った。なので、私にとっては「柿田川」ではなく“泉”である。

「お国自慢は何ですか」と言われたら、多分、私は“泉”と答えると思う。子どもたちがそういう状況に置かれたときに「柿田川」と言えるようになる、これはまさにアイデンティティであり、このことが更に他に与える影響は大きいと思う。

この地域に育っていく子どもたちの「ふるさと自慢・お国自慢」が「柿田川」になってもらいたい。

柿田川が未来に向けて在り続けるにはどうしたらいいか、皆さんとともに考えていきたい。

○事務連絡

・次回開催日等について事務局から事務連絡を行い、3月下旬に開催(予定)したい旨を伝え、出席可能日のアンケートを各委員に依頼した。